

声が聞こえる 田中拓也

四月から都立の小中高一貫校に勤務することになり、今年は主に中学一年生の国語の授業を担当している。入学直後の緊張している生徒たちに教える最初の教材は谷川俊太郎の「朝のリレー」。約半世紀前に発表された一編の詩を平成二十二年生まれの生徒たちが音読する姿を見ながら、私は「言葉」を「声」にした時の重みを感じている。

カムチャツカの若者が

キリンの夢を見ているとき

メキシコの娘は

朝もやの中でバスを待っている

「朝のリレー」より

こんな詩の一節を表現しながら生徒たちは何を想っているのだろう。「カムチャツカ」や「メキシコ」に行ったことがなくても、詩から想起するそれらの土地のイメージは生徒たちの心の中に次々と浮かんでいることと思う。むしろ行ったことがない土地だからこそ想像の世界は豊かに広がっていくのだろう。インターネットの普及により、私たちは瞬時に世界中の森羅万象を検索で

きるようになった。AIの進化は私たちにより最適な解を与える一つのツールとなりつつある。だが、一編の詩を音読した時に読み手と聞き手が共有するやわらかい時間というものとはどんなに科学が進歩しても変わることのない普遍的な価値があるものと思う。私はAIが作った短歌には興味がない。どんなに拙くても自分で発する「言葉」を大切にしたいし、相手の発する「言葉」を受け止めたい。その時に「声」の持つ力は極めて大きいものとなる。コロナ禍で途絶えていた学校行事の一つに合唱祭がある。クラス全員で共に歌う合唱は人によって好みはわかれるものと思う。だが、一つの歌の歌詞の意味を噛み締めながら「声」を発することは人間の本質的な精神世界に繋がる行為だと私は感じている。人と人を繋ぐ本質的な行為の一つは間違いなく「声」なのだと私は思う。

最近、私にはさまざまな死者たちの「声」が聞こえるようになった。それはオカルト的な話ではない。かつて、様々な場出会った人々の「声」が聞こえるのである。大学を卒業して、教員生活をスタートした時に玉井慶子さんがかけて下さった「あなたはこれからとても忙しくなると思うけど、一日に一瞬でもいいから短歌に触れる時間を作りなさい」という励ましの「声」。初めて出会った夜に、自身の短歌への想いと教員生活をたづねると語り聞かせてくれた今泉進さんの「声」。他にも沢山の人々の「声」が折に触れて私の胸の中に響くのである。私はそれらの「声」に生かされて今日を生きている。